

アンダークラス概念の自己成就——実体化の危険

深 澤 建 次*

1. 包摂と排除

現代の主要な社会問題の一つは「新しい貧困」である。この問題に対して「階級」は、その前にどのような形容詞が付くかで機能を一変する。まず「ニュークラス」について、70年代の米国に、脱産業化、上昇するベトナム戦費とこれに伴うスタグフレーションに乗じて台頭する新保守派は、政敵のリベラリストたちをニュークラスに集約して攻撃する。実際には集団すら構成していないリベラルな知識人/指導者たちを、「リベラル派集団」、「エリート集団」を超えて、福祉の公費を自己保身に悪用する「邪悪」なニュークラスに纏めたのである。集団そしてエリートを超える「階級」の「巨大さと脅迫のオーラ」を利用するためである。サイレントマジョリティの「内なる怒り」に乗じたこの戦略は功を奏し、リベラル派は沈黙させられ敗北¹⁾し新右翼の台頭を許す。貧者の味方は仮面にすぎず、公金を横領して私腹を肥やしているという「正体」が暴かれた、否、人々はそう思わされたからである。こうして公的扶助に頼る新しい貧者は後ろ盾を失うばかりでなく、ニュークラスの同類とされ排除されていく（エーレンライク 95）。

しかし対照的に貧者の味方になる「階級」もある。ニュークラス以上に巨大で、邪悪と正反対に機能する階級である。80年代に登場する「クリエイティブ・クラス」である。それは労働者階級よりも大きい。のみならずこの階級は、エリートのでも排他的のでもなく貧者を包摂する

機能を持つ。「すべての人間はクリエイティブである」、「もともと人間一人ひとりがとてつもないイノベーションを生み出す可能性を授かっている」、「すなわちクリエイティブ資本は無限の資源」（フロリダ 07:45）なのである。

むろん私は能天気ではない。同時期に対照的な階級が登場するからである。すなわち「アンダークラス=UC」である。「アンダー」の内包は「クリエイティブ」の対照形を超える。「階級外 out of status」（B. クリントン, Gans95:36）への閉鎖を正当化するからである。「汚れ」た「絶対的他者」にされるからである。「犯罪の恐怖」を撒き散らす「破壊的で余分な UC」（73, *Public Interest*）、想像以上に「手に負えない、異質、敵対的、迷惑」（77, *Time*）とされるからである。しかしたとえそうだとしても、現代はクリエイティブ・クラスの時代であるというメッセージは、UC のラベルを貼られる黒人貧者の若者に、自らに眠っている潜在能力を開発すれば、自力で絶望から脱出できるという一縷の希望（幻想）を与えることは否定できない。偶然のチャンスさえものにすれば、ハレームの極貧の若者でもジョーダンになれる、あるいはセレブになれる！と同様に。

「クリエイティブ」と「アンダー」という二つの階級の並存は、貧者の若者に、潜在的可能性を開花しうると期待を抱かせると同時に、現在の過酷な現実を思い知らせる。彼らは包摂されると同時に排除される。けれども彼らの現実的な選択肢は、異議申し立てをせずに、否、できないがゆえに低賃金/不安定労働に耐えて、「健気な」ワーキングプア=WP として賞賛さ

* ふかざわ・けんじ
埼玉大学教養学部教授，社会学

れるか、薬物に手を出して犯罪者になって蔑まれるか、あるいは福祉を受給して怠惰/無責任と叱責されるかである。

以下は、これが現実化する過程の一端を、UC 概念の検討を通じて解明する試みである。うえの雑誌に明瞭のように、スティグマ/道徳的欠陥を内包するこの概念の可否については議論が分かれる。たとえば当初 UC 概念を積極的に採用しながらもその後、否定的内包を警戒して、これを放棄して別の概念を提唱している論者もいる (W. J. ウィルソン)。私の基本的立場を明らかにしておきたい。まず、UC 概念を放棄すべきではない、採用すべきであると私は思う。「労働予備軍」から「新しい貧困/余剰/人間廃棄物」(パウマン 07:08) への、あるいは「希望の持てる貧困」から「希望の持てない貧困」(Katz93:447) への変容を把握するには、不可欠かどうかはともかくも、UC は適切だからである。下層階級 (lower class) やルンペン・プロレタリアート=ルンプロでは不十分なのである。UC は、上昇移動が構造的に閉鎖されているという意味で、まさしく「階級外」なのである。63 年に G. ミュルダールが、到来する脱産業化の犠牲者を UC と呼んだのは的確である。ところがそれから 10 年後の米国に登場するこの概念は、その内容を一変して、うえのように「汚れた他者」になる。経済学的で人種を不問したミュルダールの UC は、過激な逸脱行動を「中枢的属性」とする貧しい人種のマイノリティという UC に変換される。ミュルダールの予言は、黒人若者の「手に負えない」凶悪犯罪に具体化する²⁾。同時に、構造は背景に押しやられ、焦点は彼らの逸脱行動へ移動し、その脅威/危険が強調される。UC は、主流米国人という公衆に敵対する他者になる。

構造的な「階級外」は、政治的操作つまりモラルパニックの創造を通じて、人々の意識上の

階級外に転換されるからである。構造は見えなくなり、うえの雑誌にも示唆されるように、替わって、当事者の倫理の欠如すなわち自己責任が浮上する。因みに私の辞書 (Cobuild) には、UC とは「改善の見込みがほとんどない貧者」とある。そう規定する主体である構造すなわち為政者/メディア/知的指導者は、跡形もなく消えている。この過程こそ UC 論で問われるべき中枢的課題であって、UC 概念の可否をめぐる無前提的な議論は無意味を越えて有害ですらある、と私は思う。うえからの UC 排除の隠蔽こそ究明されなければならないのである。そもそも UC を「汚れ」として忌避するのは、一般人—たまたまいまは貧者にすべり落ちていない人々—ではない。そう主張するパウマン (08:150-51) やヤング (07:62) は短絡している。そうではなくて、第一の主役は権力/メディア/指導的知識人である。一般人は操作される脇役にすぎない (深澤 10)。それゆえうえからの構造的排除が隠蔽され、一般人による排除に転換される過程こそ問われるべきであるが、むろんスペースの限られた、小稿でこれを解明するわけにいかない。否、現在の私にはその力量はない。

以下で射程に入れるのは、その一端である。私は、構造から個人への焦点の移行が、権力者/メディア/指導的知識人そして一般人を越えて、UC の母体である黒人にまで、さらにリベラルな社会学者 (ウィルソン) にも及んでいるのではないかと思うのである³⁾。なぜ構造は巧妙に焦点化を免れるのか、これを考察するのが小稿の目的である。私は、現在の過去に対する「後光効果」の意義を指摘したい。次に私は、社会的排除論と UC 論を区別 (岩田 08:38) しようとする姿勢にも反対である。構造的排除は社会的排除を通じて最終的に、UC 自身の自己からの排除 (湯浅 08:61) に至ると考えるからである。UC 論は、社会的排除論⁴⁾に接続可能だし、そうし

なければならぬと主張したいのである。

最後にもう一点述べておかなければならない。否定的内包を不可避免的に伴う UC 概念の採用は、実在としての UC を肯定することにイコールではないからである。したがって私は、UC は仮構である (Gans95:3; ケリー07:46) という立場を採る。けれどもたとえ実在しなくてもこの仮構は、一般人の意識を規定するばかりでなく、当の UC と呼ばれる人々の意識を拘束する。犯罪に無縁な福祉受給者は犯罪者扱いされる。つまり仮構は実質的機能を有している。実在しない階級が人々を捉えるのは、ニュークラスの「邪悪」に例証される⁵⁾。クリエイティブ・クラスも同様である。階級としての UC は大きくない。ニュークラスはともかくも、クリエイティブ・クラスより遥かに小さい。しかし「汚れ」は、階級的規模に反比例して強い。一般人が UC と呼ばれる人々を忌避する、否、そうするように操作されているばかりでなく、当の UC 自身も、自らを嫌悪するように追い込まれるように思うのである⁶⁾。いずれにせよニュークラスのように集団を構成しなくても、クリエイティブ・クラスのように地位や利害を共有しなくても、さらに UC のように、集団ではもとより階級でもなくとも、人々に訴求すれば、階級の構築は可能であり実質的機能を持つのである。

以下の具体的作業を次のように進める。次節で、UC 概念に内在する過剰包含と過剰排除の並存という矛盾を明らかにし、続く3節でこの矛盾にも拘らずなぜ UC が実際に成立して、政/メディア/学界に普及するのか、その具体的構築過程を解明する。そして4節で、UC 概念を実体化する危険を指摘し、そのインプリケーションを考察する。

2. 内在的矛盾

当然ながら UC 概念に合意される規定など存

在しない。犯罪者/福祉受給者/シングルマザー/家にいない父親/アルコール・ドラッグ濫用者/銃を持った若者、これらすべてを、どうすれば一つの階級に当てはめることができるのか(ケリー:46)。どうすれば、「非行少年、学校の落ちこぼれ、麻薬常習者、ウェルフェア・マザー、略奪者、放火犯、暴力犯罪者、未婚の母、売春幹旋人、売春婦、物乞いなど」(77Time)の雑多な人々を「手に負えない、異質、敵対的、迷惑」に要約できるのか。2世代経ても貧困から抜け出せない貧者を、予め UC と規定したうえで、この階級を、①福祉に囚われた受動的貧者、②敵対的貧者としての街頭犯罪者、③必ずしも貧困ではない詐欺師、④アルコール中毒患者、放浪者、ホームレスなどの病んだ人々 (Aultta82:17) に4分して、公衆の「敵対者」に要約できるだろうか。

いずれにせよ UC の外延は多様である。これを整理して精巧な概念規定をしようとすることは、むしろ私の関心外である。そんな試みはナンセンスである。

私は、UC の分類上の特異性その内在的矛盾に注目する。UC は、「主流米国人」(「一般的価値を受容している人々」「公衆」「中産階級」)から、手に負えず異質/敵対的/迷惑な人々として、峻別 (over exclusion, Tajfel&Forgas81:121) される。主流にとって UC は「絶対的他者」(Macek06:50)である。すぐ後に明らかにするように、主流とは、実在する人々ではなく観念/仮構であること、それゆえに峻別/他者化するのには、通常、国民の代表とされる中産階級⁷⁾ではない、つまり国家権力そしてメディア/知識人であることに留意しておく。

次に他者あるいは手に負えない/異質/敵対/迷惑の根拠は何であろうか。周知のように、それは、UC に固有とされる行動傾向、その集積としての「貧困の文化」、さらに「生得的劣位性(べ

ルカーブ)」であると指摘されてきた。けれども行動傾向は、上記のように極めて多岐にわたる。すなわち種々雑多の undeserve な行動を含んでいる。まず確認しておくべきは deserve/undeserve の相対性である。「抗議運動/蜂起」と「暴動」は、それぞれの脈絡を事後的に検討しなければ区別できない。後に、脈絡の変更に伴って前者が後者になることを指摘する。UC 概念の特徴を伸縮自在の傘にたとえる論者 (Gans:17) もいるが、私は「過剰包含 over inclusion」(Tajfel&Forgas:121) を採用する。その含意は、undeserve とされる属性はおおよそ何であれ、UC のみに帰属されることにある。けれどもこの一方的帰属は、必然的に自己に跳ね返って自他の境界は解体せざるをえない。事実、UC に固有とされる属性は、主流に無縁とは到底いえず、多かれ少なかれ共有されている。怠惰な人間は上流階級にもいるし、中産階級の薬物使用の頻度は、薬種によっては UC 以上 (トンリー 09:30) である。ホワイトカラー犯罪に明瞭なように、犯罪は UC に固有ではないし、シングルマザーや福祉に依存する人も同様であるし、長期の貧困に悩まされる白人労働者階級も少なくない。UC の行動傾向は、多かれ少なかれ、対照としての主流にも共有されている。これを無視して UC のみに帰属する事態は、過剰包含というのが適切であろう。「貧困の文化」を動員しても牽強付会にしかならない。つまり他者化は不可能である。この文化の中核的属性である、充足を遅延できないという「現在志向」は、まさに今日の消費主義の要諦だからである。ヤッピーの過激な消費主義と UC の現在志向は類似した精神である (エーレンライク:254)。付言すれば、プロテスタント的な勤労精神/精励刻苦はもはや時代遅れであり、マネーゲーム/刹那的/奢侈的消費こそ時代の要請なのである。充足の遅延/現在志向が貧困の文化であるとすれば、現代の

主流文化は貧困の文化といわなければならないはずである。否、いえないからこそ、貧者の「怠惰」を際立たせなければならないのである。

要するに、生得的差異はいうまでもなく、UC に固有な行動傾向/文化は存在せず、それは主流にも多かれ少なかれ共有されている。けれどもそれは UC 固有の属性にされる、つまり過剰包含される。にも拘わらず、UC は過剰排除される他者である。これが私のいう特異性である。UC は、主流と相互重複的でありながら同時に相互排他的である⁸⁾。なぜこのような矛盾を内在する概念が、為政者はともかく、メディア/人々/社会科学者に重宝されてきたのか。それは、主流の正体が現実離れした空想の所産であること、そして同時に UC も同様であることを端的に示している。双方は実態ではなく、想像上の分類カテゴリーであることを確認しておく。

しかしたとえそうだとすると、主流は、なぜ undeserve な属性を UC に自在に帰属しながら、同時にこれを過剰排除できるのだろうか。

UC を字義通り捉えるならば、その形式的外延は、クリントンのいうように「階級外」である。UC は「階級」なしに成り立たない、階級の従属/残余である。双方の間に力関係の圧倒的差異が存在しているのは明らかである。階級が階級外を一方的に規定する反面で、後者はこれに異議申し立てを一切できないのである。排除され閉鎖される UC に発言権は存在しない (バウマン 08:144)。事実、UC に限らず貧者は投票しないしできない。したがって双方は、水と油のような対等な対照関係にはないのである。言い換えれば、「怠惰/無責任/逸脱」といった UC の行動傾向は、階級が一方的に規定した所産でしかない。けれどもこの規定の主体の中身、つまり階級の外延は、少なくとも形式的には、上/中/下そしてその下の人々、ルンプロ、すなわち圧倒的多数の人々にまで及ぶ。これを想起すれば、

怠惰/無責任/逸脱を帰属する実質的主体が主流はたまた中産階級、いまは貧困を免れている一般人でないのは明白である。それは権力者/メディア/知識人以外にありえない。というのは、階級つまりアッパーからルンプロまでの人々に共通する属性を具体的に列挙することなど到底できないからである。だからこそ、利害を異にするこのような雑多人々から成る階級を主流に転換するのである。UCに対置されるのは階級ではなくて主流なのである。

したがって主流は実態を欠いた仮構以外の何ものでもない。なぜ仮構しなければならないのだろうか。答えは明白である。主流などまさしく存在していないからである。言い換えれば、これまで一般に受容されていると想定されていた平均的、すなわち中産階級の価値観の实在信仰があやふやになったからこそ、これを仮構しなければならないのである。仮構は、「昔はよかった症候群」に例証されるように、通常、過去を理想化した形態を採る。けれども理念としての公衆を、郷愁に訴えて人々に想起させるだけでは不十分である。公衆がもはや存在していないことを誰よりも知っているのは、権力者/メディア/知識人なのだから。現実感を伴う郷愁にするにはどうすればよいか。ここでも答えは単純である。すなわち公衆観念を明確に拒絶する *undeserve* な行動傾向を、臨機応変且つ危機感を促すように構築して、この主体をUCと呼称すればよいのである。見落してならないのは、このようなUCの構築自体が、対照的な公衆の創造に直結することである。全能の権力は片務的な「相互性 *complementary*」を確立できるからである。それゆえこうして創られたUCは、必然的に対照形である公衆を内包する、あるいは公衆と連合する。公衆は、己の *deserve* 性を具体的に証明する義務を一切放免される。相手の欠陥の「例証」は、己の潔白の「証明」に自動的に

なるからである。公衆観念を否定する負の属性を臨機応変に集積してその主体をUCと規定すれば、自らの *deserve* 性が保証されるのである。それゆえUCを構築する目的は、主流の構築である。

以上から、UCと主流米国人は、越えられない境界線を挟んだ相互の否定的ミラーイメージである(Auletta:12)という指摘は極めて不適切である。境界線など実際には存在しえないし、双方の力関係は *all or nothing* という不平等だからである。相互の否定的ミラーイメージとは、一方的な力関係に基づく構築過程を捨象してその結果のみに注目した幻影にすぎない。

3. 秩序

過剰排除と過剰包含の並存という矛盾を内在するUCカテゴリーの成立要件は、*all or nothing* という権力の絶対的差異であると述べた。むろん問うべきは、具体的にどのようにこれが行使されて矛盾が「止揚」されるかである。

「余剰」と化した新しい貧者の「処罰」(Wacquant09)が、その答えというのは短絡である。属性の過剰包含/共有性を前提にする限り、処罰は不可能になる、少なくともそれを正当化する説得力を欠くのは否めない。幸いいまは貧者ではない「普通」の人々に受容されるには、「貧者の処罰」のみでは不十分である。滑り落ちる危険を自覚させられている彼らは、いずれ自分たちも処罰されると恐れないわけにいかないからである。

指摘されるように、脱産業化/新自由主義体制/マネー資本主義のグローバル化は、格差を拡大し余剰としての新しい貧者を大量に産出する。この構造的変容は、大きな政府・福祉国家/フォーディズムのもとで、曲りなりにも維持してきた社会秩序/統合、倫理、家族、コミュニティの解体を促進する。「野放図な個人主義」「社会

的アナーキーやニヒリズム」(ハーヴェイ 07:116) が社会全体に蔓延する結果、それまでの連帯感は消滅して人々は孤立する。人々は、将来の見通しを立てられないという混乱/困惑/当惑に直面する(バウマン 07:26)。要するに、今日は、社会的にもまた個人的にもアノミーが病理ではなく常態化する。したがって社会秩序の再構築は急務となる。むしろこの第一の主体は国家権力である。国の生産性は損なわれ、福祉予算は巨大化し国民的統合は覚束なくなり、政治の安定性は危うくなるからである(Peterson91:9)。しかし私は、後述のように、マイノリティ/貧者内でも、秩序の再構築がより過酷な形態で実行され、UC が生み出される、少なくとも増殖されることを強調したい。

まず次の二つの指摘に一目置かなければならない。

譴責blamingと正義の体系は、ともに、社会秩序が構成される様式と同義である。…危険dangerは公共福祉を擁護するために規定され、譴責は、人々をこれに貢献するように説得する手続きの副産物である(Douglas92:6)。秩序というものはどんなものであれ、現存の住民の一部を“場違いな”“不適当な”“望ましくない”などと割り振る(バウマン 07:9)。

以上の内外集団化による秩序形成の原理を、今日に適用したらどうなるだろうか。譴責/危険の標的にされ「場違い/望ましくない」とされる住民とは、具体的には誰だろうか。すでに言及したように、脱産業化は製造業からUCを排出する(ミュルダール)。そしてその後の新自由主義/マネー資本主義のグローバル化は、大量の不安定/低賃金労働者を産出する。ダウンサイジング/リーン生産/株価至上主義の今日において、この新しい貧者が、譴責/危険の標的にされるのは

必然である。彼らは、労働市場への復帰を期待されない、それゆえに福祉を施す必要のない、「失業者」と異なる「余剰/人間廃棄物」(バウマン)だからである。けれども例外があるのはすでに述べた通りである。新しい貧者すべてが、一様に譴責の対象/危険とされるわけではないのである。貧困に限らず、「厄介もの」となる人々が増えれば、HIV 感染(エイズ)者の「よい」(e.g. 血友病)と「悪い」(e.g. 麻薬常習者)の二分化に例証されるように、deserve と undeserve との差別は常である。それゆえ、いかに不安定/低賃金でも異議を唱えず黙々と働く WP は、主流で廃れた勤労精神を想起させるために賞賛され deserve とされるのに、WP を拒否する、たとえば育児に追われて就労しなければ「怠惰」、福祉を受給すれば「無責任」undeserve と譴責されるのである。

誤解してはならない。怠惰/無責任だから危険とされ譴責されるのではなく、失われた秩序の回復あるいは新秩序の要件として、危険/譴責の対象が新しい貧者に定められて、怠惰/無責任とされるのである。第一は先行する危険視/譴責であり、怠惰/無責任は、それを正当化する事後的付録である。むしろ権力が悪意の固まりであるからではない。秩序はそもそも危険視/譴責なくして成り立たないのである。

この秩序観を前提にする限り、そして上記のようにアノミーが今日充進しているとすれば、「場違い」を譴責する必要度は相応して高くなるざるをえない。「テロとの戦い」「法と秩序」「モラルマジョリティ」「ゲイテッド・コミュニティ」「セキュリティ」は、その象徴である。けれどもいかにむき出しの強権を行使して貧者を処罰しようとしても、その属性が主流にも共有される限り、貧者のみを罰することはできない。つまり説得性を欠くのである。共有性にも拘わらず、貧者のみを罰する「正当な」手続きが不

可欠になるのである。

これが、示唆してきたように、「不潔と危険という極めて強力な象徴」(ダグラス 83:157)である。今日のように「倫理的規範が曖昧であったり、矛盾したりする場合には、汚れの信仰が問題点を単純化もしくは明晰化する傾向」(ダグラス 95:268)は促進されざるをえない。ダグラスによれば、この場合、不潔と危険、汚れを規定するのは、行為者の意図とか、権利/義務の微妙な均衡ではなく、「唯一」「禁じられた接触が行われたか否かという事実」(:248)である。では、「禁じられた接触」とは、今日において具体的に何であろうか。そのような事実など存在しえないのは、属性の共有性で明らかにした通りである。むしろそれは「汚れ」が機能しないことではない。それどころか、共有性の高まりに比例して、汚れの必要性は、先の秩序形成の論理から増大せざるをえない。そして階級/主流と階級外/UCの間には圧倒的な勢力の差異が存在している。それゆえ、たとえいかに事実として、双方の属性が共有されようとも、否、されればされるほど、前者はUCの属性を汚れと規定して、双方の間に絶対的な境界線を引いて、UCを過剰排除しなければならなくなるのである。権力の極限的差異は、事実としての属性の共有を否定して過剰包含させ尚且つ過剰排除できるし、しなければならないのである。

では、この境界線は具体的には何を基準に引かれるのだろうか。それはもちろん犯罪、なかんずく「暴力」犯罪そして「ランダム・バイオレンス」である。より大きな社会的損失をもたらすホワイトカラー犯罪を見えなくさせる「血みどろの生々しさ」「モラルの欠如」を明示する、街頭暴力、薬物犯罪、薬物をめぐるギャング団の抗争である。UCのもっとも直接的な指標は、「暴力犯罪」(Auletta:79;Murray99:2)なのである。このようなUCを際立たせる「危険」な犯罪

の構築、そしてそれが人々をモラルパニックに誘導する過程については、すでに少なからず指摘されているので、ここではモラルパニック以前の、UCの「凶悪」犯罪の「後光効果」に注目したい。マイノリティ/貧者によるUCの創出が小稿の焦点だからである。

まず確認しておかなければならない。「凶悪」犯罪の背景は、社会構造の変容そしてそれがもたらす恒常的な貧困である。つまり新しい貧困こそ、この種の犯罪の根源なのである。貧困への恒常的な閉鎖は、すぐ後に述べるように、貧者を犯罪へ追い込むからである。けれども貧困は通常隠さればかりでなく避けられる。統治に支障がない限り、権力はこれに正面切って対処しない、する必要がないからである⁹⁾。いま貧困を免れている一般人も同様である。彼らは、貧困で荒れた地域をぶらつくことなど通常はしないし、そこに近づかないように教えられる(パウマン 07:47)。さらに貧者自身も自らの貧困を積極的に見せることはしない。そうであれば、秩序再建を急務とする国家は、譴責する新しい貧困を、見えるようにしてそれが人々にとって危険であると説得しなければならなくなるはずである。この可視化と危険化の過程はどのように進行するだろうか。新しい貧者は、どのように目に見える危険なUCという敵対的階級に集約されたのだろうか。少なくとも、集合的カテゴリーとして認識される基盤が整わなければならないはずである。

一に、不幸なことに(権力にとって都合がよいことに)、誰の目にも見えるような、新しい貧者が集中する特定の地域が形成されるのである。産業構造の変容、気まぐれなマネー資本主義のグローバル化に翻弄されて、インナーシティ/ゲッターからの脱出の途を閉ざされ、そこに滞留する、黒人若年層を中心とする「ほんとうに不利な立場におかれる人々」(ウィルソン)であ

る。入隊以外に定職のない彼らは、恒常的失業状態に閉鎖される。稼ぎのよいドラッグや犯罪の誘惑に彼らが抗するのは難しい。

公共投資の抑制と redline 指定による不動産市場からの排除、さらにジェントリフィケーションの進行に伴って、インナーシティ/ゲットーという地域の荒廃はより顕著になる。そしてそこには黒い皮膚の若者が集住する。さらに彼らの言葉遣いは他の地域の人々とは異なる (Katz:457)。荒廃/黒人若者/言葉遣いは、貧困の簡便な cue value として作用せざるをえない。逆にいえば、集住しない、言語的特徴を有しない白人貧者は見えなくなる。黒人の貧困は、地域/人種/年齢/文化レベルで、すなわち集合的カテゴリーとして一挙に認識されてしまうのである。

二に、この集合的貧困は、すでにビジュアルに「汚れ」ている。そして「厳罰化」(ゼロトレランス/割れ窓/三振アウト)に具体化する新秩序建設は、これを「実証」する。現行の刑事裁判には人種差別が組み込んでいる(ウィルソン:30=65)からである。これについても少なからず指摘されている (Macek, トンリー 09:29, Wacquant09) が、ここではデーヴィスを援用する。黒人自身による秩序の回復過程を明らかにするためである。

まず 80 年代のロスアンゼルス=LA で、脱産業化に伴う失業と貧困の結果、コカインをめぐるゲットーの黒人若年層の縄張り争いは激化し血みどろの抗争が反復される。87 年以降、ギャング関連の殺人は日に一件以上になる(デーヴィス 08:225)。社会の木鐸という使命感に燃えるメディアは、日々生じる経済暴力を隠して、犯罪に手を染める若者、精神をわずらうストーカー、クラックでハイになった若いギャングを扇情的に報道する。そしてあらゆる殺人を一面掲載する (:229)。これを追い風に、警察は、ギャ

ング団を標的にベトナム戦争並みに、たとえば 16 キロ四方におよぶ「鉄槌作戦」を展開して、LA の黒人若者人口は 1 万人であるにも拘わらず、総計 5 万人もの容疑者 ―その多くは酔っ払い/暴走族/外出禁止令違反者― を逮捕する。あるいは若い警官をスパイとして学校に潜入させドラッグを売るようにそそのかして、重犯罪検挙率を安上がりにも上昇させる。メディア/警察連合軍による厳罰化体制は、ゲットー以外の人々、特に郊外に居住する白人の「スリル/覗き見趣味」を「恐怖」へ変えて、モラルパニックへ誘導する。その結果、「セキュリティの概念¹⁰⁾」は流通し「ゲイテッド・コミュニティ」は流行る。こうして、黒人若者は、社会復帰できない (hard core) の犯罪者、したがって極力長期に収容して隔離しなければならない UC に構築されて、秩序は回復し「社会正義」が実現される。

以上の過程で決定的に重要なのは、次の二点である。その一に犯罪の後光効果である。犯罪は行為であるが、この行為はギャング団を通して集団へ拡張される。しかし後光は波及していく。ギャングの構成員は、その家族に及んで「ギャングの家族」が、次いでその近隣に及んで「ギャングの近隣」「ゲットーは危険な犯罪地域」が構築される。さらに「ギャングの世代」が続き、犯罪は世代を超えて伝達されることになる。こうして犯罪は、個人から集団、地域へ、さらに世代にまで波及していく。ゲットーの黒人は次世代を含めてすべて犯罪者にされるのである (:238)。ここまでくれば、「ゲットーの黒人=犯罪者」が、「黒人=犯罪者」 (:243) にまで拡張するのは避けられない。これが厳罰化、80 年代の LA の警察当局による「鉄槌作戦」の成果である。

それゆえ、ゲットー/インナーシティの犯罪に無縁な福祉の受給者が、犯罪者の同類と見られるのは不可避である。福祉の受給者が居住地域

内で犯罪者と交流(ウィルソン:8=28)しょうとしまいと、権力者(クリントン)による「福祉から労働へ」キャンペーンが効を奏しようとしまいと、彼らは、犯罪者とカテゴライズ/認識されてしまう。少なくともその危険が大きいのは否めない。こうしてゲットーの未婚の母親は再生産(baby having baby)されるから、福祉は税金の無駄と叫ばれる。welfare queen が有権者に訴求する基盤は整う。「ゲットー＝犯罪地域」と「黒人＝犯罪者」という二つの図式の成果である。

その二に、犯罪の後光効果の必然的副産物は、黒人による黒人に対する「前代未聞」(デーヴィス:245)の過酷な排除である。黒人自身による黒人の「汚れ」の浄化である。すなわち、いまは犯罪と無縁になった黒人中産/労働者階級は、警察/メディアの厳罰姿勢を支持し、「黒人のテロリスト/獣のようなクラック中毒のファシスト brutal crack fascists」(:245)を、「家父長的権威主義」的「害虫駆除的 exterminist」(:246)に排除する。彼らは、差別への抵抗うえに何世代にもわたって築き上げてきた黒人共同体の崩壊を防ぐために、「犯罪者扱いされるゲットーの若者を、生贄 sacrifice にするあるいは見捨てる triage (つまりゴミ garbage として)」(:247)¹¹⁾。私はこの排除を「超」過剰排除と呼ぶ。「骨肉の争い」よろしく、前成員は非成員よりも強く非難しなければならないだけではない。贖罪のための「凶悪な」生贄を提供しなければ、「黒人＝犯罪者」というスティグマが自らに波及する危険を防止/周辺化できないのである。そうしなければ営々と築いてきた己の存在基盤が破壊されるからである。これを阻止するには、彼らの「汚」を強調して自らの「浄」を対照的に浮かび上がらせなければならないのである。

この過程は、基本的には、先述した主流による犯罪者としての UC の構築と同じである。しか

し黒人中産/労働者階級による UC 構築は、より過激な形態を採らざるをえない。そうしなければ皮膚の色という共通項を通じて、汚染が自らに及ぶからである。彼らと「犯罪者」の間には、主流と UC の間にあるような皮膚の色の違いはない。したがって外集団の汚れを強調して、内集団を構築しなければならない必要度は、主流よりも高くならざるをえない。主流による UC の構築に加えてさらなる UC 化を図らなければならない。「害虫駆除」に明瞭な UC の UC 化、これが超過剰排除の所以である。そしてこの家父長/権威主義的排除を通じて、黒人社会の秩序は回復され「社会正義」は実現される。こうして UC の「手に負えない/異質/敵対的/迷惑」は、黒人自身によって「実証」される。害虫ラベルを貼られてさらに UC 化される黒人は、かつての仲間の黒人によって排除され閉鎖される。それは、同時に黒人の貧困と犯罪の結合を強化する。貧困ゆえの犯罪は、犯罪ゆえの貧困に、さらに犯罪ゆえの黒人に逆転する。のみならず福祉受給者にまでこの後光は波及していく。貧しいから福祉ではなく、福祉受給だから貧しいのだ、貧しいのは自己責任なのだ、という具合に。貧困は、その構造的背景を覆い隠し貧者自身を責める論理を内在している。

4. 自閉

産業構造の変容は、以上のようにたんに新しい貧困を生み出すだけではない。黒人中産/労働者層と極貧若者層を分化して、前者による後者に対する「害虫駆除」という超過剰排除を生み出す。これに対して黒人 UC はどう対応するだろうか。70 年代以降、彼らの味方だったリベラル派知識人たちの勢力が弱くなったことは触れた。そして 80 年代には、左翼は「悪魔のごとき他者」(:243)にされてしまうとすれば、極貧層が UC から脱出する展望はより狭ばまざる

をえない。害虫扱いされ、生贄として見捨てられる彼らが、このラベリングに異議申し立てをする余地はより小さくならざるをえない。

これを検討するには、少々遡って、60年代の公民権運動のパラドクスを押さえておかねばならない。この運動は形式的には成功したけれども実質的成果をもたらすことはなく、かえって黒人内部での分裂を生み出したからである。公共施設/輸送機関を利用する権利が黒人に認められても、そもそもこれを行使する金を、彼らは持てなかったのである(ウィルソン:126=211)。人種を基準にした公民権改革は、恵まれた高所得黒人中産階級に恩恵を与えたものの、貧困層の生活は改善されなかったのである(:114=189)。アフーマティブ・アクション=AAも同様である。ブルーカラーの労働者、すなわち黒人にほとんど有効性はなかったし、AAが実施されてもゲットーの黒人の失業者は増大し、白人に比して世帯所得は低下し、単身親世帯/福祉依存そして犯罪は増加したのである(:138-39=231-32)。要するに、公民権運動そしてAAは黒人内の階層分化を促進し、一方で恩恵を被って上昇移動した中産層と他方で置き去りにされた下層部の乖離を拡大し、後者に相対的剥奪/不満を蓄積したのである。

60年代の福祉改革が格差を拡大し、相互の相克を生み出したという皮肉は重要である。構造的変容に目を向けない限り、黒人は無能で怠惰であるという「歴史的人種差別」が正当化されるからである。彼らに優先的な施策を実施しても効果が見られないのは、自ら立ち上がろうとする意欲がないからである。彼らの「蜂起/抗議運動は、実際には、甘えた「暴動」だったのである。したがってこれ以上彼らに公費を費やすのは税金の無駄である。

1980年代までに、多くの思慮深いアメリカ

市民 thoughtful American citizen は、公民権運動の支持者を含めて、黒人コミュニティで進行していた事態に困惑した。反差別法が承認され、AAプログラムが実施されたにも拘らず、かなりの黒人の状態はよくなるどころか、悪化していると感じた(:128=215-16)。

そればかりではない。黒人指導者も一様に、事態は悪化していると認識し、白人たちが、問題への対処を放棄しまったと嘆いた。こうした事態の進行に直面して「何もよくなならない」と信じる多くの黒人に、そしてそうでなければ改革により前向きに取り組んだ多くの白人に、貧困から脱却できない黒人は道徳的に退廃しているのではないかという発想が芽生える明瞭な兆しが、レーガン政権以前にあったのである(:129=216)。

そしてこの兆しは、20年後の80年代、黒人低所得層の集住化と、ゲットーの荒廃と危険という目に見える事実具体化し実証される。大量の失業者、公然の無法行為、学業成績の芳しくない学校が集積し、郊外住民は避けるようになるからである。それは、同時に、黒人向けの福祉は税金の無駄づかいである、という主張の正当性を強化する。まさしくゲットーの黒人貧者を絶対的他者にする。こうして60年代に芽生えた黒人の道徳的退廃は汚れた他者に収束する。

だとすれば、80年代のこの他者が、遡及的な後光効果を作用させても不思議ではない。すなわち、現在による過去の再構築である。断るまでもなく、この再構築は平凡な日常的営為であって新奇性はない。凶悪犯の生活史が、それに即して再構成されて「凶悪」性を「実証」するように。幼少時から「粗暴」の片鱗は窺えたかのように。現在を肯定する過去の事例を探索して、双方を一貫させるのである。実は、UC概念にも

これが妥当する。それは、UC と呼ばれる人々をさらに閉鎖する。彼らは、現在ばかりでなく過去も閉鎖される。この点は、ウィルソンにさえ当てはまる。

[奴隷制から 20 c 半ばまでの]歴史的な人種差別の後遺症のひとつは、UC の黒人が大量に中心大都市に出現したことである (:33=69)

黒人 UC の位置は、最も徹底した反人種差別立法と政策が制定され、実行された時期に悪化した (:134=225)。

ウィルソンにとって、UC とは、そもそも 80 年代にゲットーの階層構造が変容した結果、社会的に孤立させられて犯罪/福祉依存などの社会病理に苛まれる「ほんとうに不利な人々」だったはずである。しかしうへの引用によれば、第二次大戦後、農村から大都市へ移住した黒人の大半は、すでにその時点で UC だったのだ。言い換えれば、産業時代全盛期においてさえ、彼らは UC だったのである。60 年代に福祉改革が実行されても、彼らの UC という位置は変わらない、否、より UC 化されたのである。成果が伴わなかったからである。私の管見する限り、すでに述べたように、UC 概念を最初に提唱したのはミュルダールであり、次いで雑誌である。第二次大戦直後はむろん、60 年代にも、この概念は少なくとも米国には存在していない。だとすれば、ウィルソンにとって現在の UC は、過去も一貫して undeserve な UC だったのは否定できない¹²⁾。

だからこそ、60 年代の脱産業化に伴って、黒人中産/労働者階級が郊外へ脱出していくと、UC の生き方のモデルは失われて（「社会緩衝装置」の喪失）、社会病理へ傾斜していくのだ。しかしすでに見たように、福祉改革の恩恵に与れなかつ

た極貧層は、与った中産/労働者階級を敵視することはあっても、生き方のモデルとして見習おうとする姿勢などありえないはずである。まだある。ゲットーに集積する黒人貧者には、自立して就労し福祉に頼らず犯罪に走らないといった「真面目に生きる術」はもともと備わっていない、少なくとも脆弱なのである。産業時代に従事した製造業で培われたはずの生産者の倫理は、脱産業化そしてこれに伴う中産/労働者階級の転出によって、一挙に消滅してしまうのである¹³⁾。のみならず彼らの家族、学校そしてコミュニティの社会教育機関さらにメディアは、この面での社会化機能を持たないのである。

現在の過去への後光効果は、UC の歴史性、つまり社会構造の変動に伴う概念の変容過程を、捨象し不変/普遍化し実体化する。「手に負えない」UC には、もともとその素因は内在していたのだ。UC と呼ばれる人たちの孤立化は進行せざるをえない。

おわりに

貧困の内包は深い。一は、「無分別との関連」である。「ある人の貧困が、その人の無分別な行為—学校の中退、婚外出産、薬物の使用、仕事での慢性的な遅刻—にいくらかでも関係していないような事例を見つけるのは困難である」(シプラー 07:11)。インフォーマル経済を必然化する貧困を凝視すれば犯罪の発見は自明である。より重要なのは、二に、貧困への閉鎖は、長期にわたれば、社会的排除を超えて、自己からの排除へ至る危険である。教育に始まって、企業福祉、家族福祉、公的福祉を経て、社会的排除は、最終的に自己からの排除に至る(湯浅:59)。前 4 者の社会的排除を内面化する帰結である。たとえば長期のネットカフェ難民を続けている 34 歳の男性は、「今のままでいいんすよ」(:89)

と語る。結局、貧困への長期の閉鎖は、己自身の「ふがいなさ」すなわち自己責任の受容に行き着く。事情を知らぬ第三者は、これを「現状へ充足感」と捉え「向上心がない、覇気がない、甘えている」と解釈する。双方に、貧困の構造的背景は見えなくなり、専ら自己責任が替わって浮上する。

二に福祉受給者は、①他人を全く信用しないし、②一歩引きさがることは弱いことだという信念(シプラー:176)を抱いている。それゆえ福祉受給者に対する反発/反感が生ずるのは、不思議ではない。貧困/福祉受給と UC の距離は短い。

註

1. リベラル派の敗北要因を、エーレンライクは、中産階級の精神的弱みすなわち「転落の恐怖」に求める。これに対してウィルソンは、知的力量不足を指摘する。同時に、インナーシティ/ゲットの社会病理の研究は、黒人に不利に作用するので、UC 概念の採用を躊躇したという(ウィルソン:6=25)。対照的に保守派は、UC 概念を積極的に採用し、事態を体系的に論じたばかりでなく、人受けしやすい議論を展開したという。いずれにせよ、指導的知識人とその学術的水準は、イコールではないことを確認しておく。
2. 米国に登場する UC は、ミュルダールの UC と、概念的には異質である(Gans:31)が、双方の間に断絶があると考えるべきではない。ともに産業構造の変容の犠牲者だからである。ミュルダールの UC は、米国の場合、80年代の新自由主義/マネー資本主義時代に、ゲットーの黒人若年層に具体化したというのが適切であるように、私は思う。
3. ケリーは、『ゲットーを捏造する』人のなかに、C. マーレーばかりでなく、W. J. ウィルソンさえも含まれるという(:25)。
4. 社会的排除論は、UC 論と同様に、モラルに欠ける特定層に結合しているように私には思われる。たとえば D. バーンのように。
5. 実質的な所得の減少/停滞に苛まれ、将来的な見通しを閉ざされた人びと/有権者に対する、ニュークラスの「邪悪」の訴求力は、大阪の「維新の会」、名古屋の「減税日本」にも例証されるように、強いように思う。

すべり台社会では、「劣位処遇の原則」が自動的に発動されるからである。相対的に安定した公務員、なかんずく有権者に近い地方公務員は、格好の「邪悪」の標的にされるようである。けれども公務員、公立学校教員を如何にバッシングしたところで、人びとの給料は一円たりとも上がらないし、滑り落ちる危険はいささかも減らない。

6. 薬物、ホームレス、刑務所暮らしの過去を背負った人々の仕事への挑戦の難しさをシプラーは指摘している。「彼らの履歴には成功を予想させるものは何もなく、自信のなさや私欲を拭拭してくれる明るい展望もない。…彼らは、電話をかけること、返事をもらえないこと、応募用紙に記入すること、面接に行くことなどに怖気づいていることを素直に認めた。真実を告げること、うそをつくことを恐れ、自らの犯罪歴にかなする避けがたい質問をビリビリしながら待ちうけていた」(シプラー07:158)。「“今まで成功したことなんかないのに今度だけうまくいくわけがない。私が成功するなんて誰も考えたことがない。誰も私に成功してほしいと思ったこともない。私が成功しようとしまいと、誰も気にとめない” と思ってしまう。新しいことに挑戦し、殻を打ち破ることに對して、強い恐怖心がある」(:338)。
7. 中立を装うメディアは、今日、しばしば「専門家」の意見と同時に「街の声」を伝える。しかし、そこに登場するのは、私が管見する限り、ほとんどワンパターンで、新橋の S L 広場を行き交う典型的なホワイトカラーである。ブルーカラーや山谷の日雇い労働者が登場することはない。
8. これに関連して、役割属性の相互共有性と相互排他性については、前に論じたことがある。参照していただければ幸いである(深澤 92)。
9. 但し今日の消費主義は、貧困すらビジネスに利用する。貧困は、脱産業時代のコマーシャルの格好のネタになるからである。ナイキ、リーボックは、ゲットーの荒廃する都市空間をロマン化してスニーカーの巨大な市場を作り出した。TV で放映されるのは「鉄鎖で閉じられたフェンス、コンクリートの運動場、曲がり錯落ちたネットのないバスケットボールのゴール、落書きがそこかしこに書きなぐられた壁、人気のないビル」であり、それは遊ぶことしかない黒人の若者の世界を創造した(ケリー:81)。
10. セキュリティの「概念」とセキュリティそれ自体は、デーヴィスもいうように決してイコールではない。建築家の五十嵐はいう。「同世代の建築家と話していると、住宅を設計するとき、施主がセキュリティのことばかり気にすると、しばしば聞かされるようになった。

これは明らかに、数年前にはなかった現象である。われわれは、いつから見知らぬ恐怖に怯えるようになったのか」(五十嵐 04:24)。

11. 引用文の翻訳は、必ずしも邦訳に忠実ではない。自由に改変している。たとえば、訳者は sacrifice を「見捨てる」、triage を「選別する」と訳しているが、私は「生贄」「見捨てる」にしている。

12. 私は、言葉尻を捉えて重箱の隅をつつこうとしているのではない。以下の、同一ページしかも隣接する段落の二文に明瞭のように、ウィルソンに、過去への後光効果が作用、少なくとも、現在が過去へ影響しているのは否定できまい。

①70 年代および 80 年代の前半、「UC のコミュニティ」は、大量の失業、罪の意識のない公然の無法性、そして成績の芳しくない学校に苦しめられ、それゆえ部外者から避けられるようになっている」(:58=104)。だとすれば、70 年代以前、つまり UC 概念が米国に登場する以前に、UC のコミュニティはすでに形成されていたことになる。80 年代に生まれたはずの UC は、それより 10 年以上前に誕生していたのであり、この限りで UC は所与/既存のカテゴリーである。しかるに同頁の次の段落に次の一文が登場する。

②「インナーシティの社会的変容は、黒人人口のなかで最も不利な立場に置かれた人々の極端な集積をもたらし、その結果、このコミュニティに数十年前に存在していたのとは、明瞭に異なった社会状況が生まれた」(:58=104)。つまり「集積効果」が作用して最も不利な立場の人々、UC がインナーシティへ堆積したのである。それゆえ UC は、集積効果の副産物である。この限りで、UC は、70 年代後半以降に生成/形成されたカテゴリーである。

①は所与の UC、②は生成される UC である。②の後光効果が①へ作動している、少なくとも現在から過去への影響は否定できない。

13. 同様の、過去に対する現在の後光効果は、他の論者にも見られる。たとえば、ケルソ (Kelso94) は、50 年代に裸一貫で何百マイルも仕事とよりよい生活を求めて北部へ移住した勤勉な黒人は、移住後、インナーシティからの脱出も労働も止めてしまう。その理由は、60 年代の「偉大な社会」による福祉受給にあるのは間違いないという。そして UC はもともと労働や家族の連帯という価値にコミットすることが弱かったのだから、60 年代の甘えを助長する風潮が蔓延したので他の集団より早くこれらを放棄してしまう(:124)、と述べる。したがって北部移住前に勤勉だった黒人は、移住して福祉政策が実行される 60 年代になると勤勉性を直ちに喪失するばかりでなく、甘えの文化が登場す

るとともに怠惰だったとされるのである。

なお、「後光効果」を採用していないものの、現在を基準にした過去の再解釈の問題は、Katz も指摘している。たとえば南北戦争直後南部諸州に制定された「黒人取り締まり法 black code」によって、黒人の季節移動は制限されていた。にも拘わらず、生活のために彼らは単身での短距離の移動を反復していた。この歴史的な事実は、80 年代に UC 概念の流行に伴って適応的に再解釈され、黒人の婚姻関係は元来不安定で、それは彼らの文化的嗜好性であり、彼らの移動性 shift は、無節操 shiftless へ翻訳される(Katz:451)、と。また黒人とヒスパニックは、イタリア、ユダヤ、アイルランド系など他のマイノリティと異なって民族固有の隙間産業を欠いていた(:454)という歴史的な事実は、黒人集団の社会的秩序/社会統制はもともと脆弱で、それゆえに犯罪率は高く社会は解体していたのだ(:455)、と。

文献

- Auletta, K., 99, *The Underclass*, The Overbook Press.
Z. バウマン, 98=08, 伊藤茂訳, 『新しい貧困』, 青土社。
—04=07, 中島道男訳, 『廃棄された生—モダニティとその追放者』, 昭和堂。
D. パーン, 99=10, 深井英喜/梶村泰久訳, 『社会的排除とは何か』, こぶし書房。
M. デーヴィス, 90=08, 村山敏勝/日比野啓訳, 『要塞都市 LA』, 青土社。
M. ダグラス, 70=83, 江川徹/塚本利明/木下卓訳, 『象徴としての身体—コスモロジーの探求』, 紀伊国屋書店。
—69=95, 塚本利明訳, 『汚穢と禁忌』, 思潮社。
Douglas, M., 92, *Risk and Blame*, Routledge.)
B. エーレンライク, 89=95, 中村桂子訳, 『“中流”という階級』, 晶文社。
R. フロリダ, 05=07, 井口典夫訳, 『クリエイティブ・クラスの世界』, ダイアモンド社。
深澤建次, 92, 「ステレオタイプ・業績役割・相互行為的役割—役割論の統合視角の模索」, 埼玉大学紀要教養学部 vol. 28:39-54。
—10, 「貧者の処罰図式—上との連帯考」, 埼玉大学紀要教養学部 vol. 46 - 2:39-54。
Gans, H. J., 95, *The War Against the Poor*, Basic Books.
D. ハーヴェイ, 05=07, 渡辺治監訳, 『新自由主義』, 作品社。
五十嵐太郎, 04, 『過防備都市』, 中公新書ラクレ。
岩田正美, 08, 『社会的排除』, 有斐閣。
Katz, M. B., 93, “Reframing the ‘Underclass’ Debate” in Katz, M. B. (ed.), *The Underclass Debate*, Princeton Uni. Press:440-477.

- Kelso, W. A. , 94, *Poverty&The Underclass*, NY. Uni. Press.
- R. D. ケリー, 97=07, 村田勝幸/阿部小涼, 『ゲットーを捏造する—アメリカにおける都市危機の表象』, 彩流社.
- Macek, S. , 06, *Urban Nightmares*, Uni. of Minnesota Press.
- Murray, C. , 99, *The Underclass Revisited*, American Enterprise Institute.
- Peterson, P. E. 91, “The Urban Underclass and the Poverty Paradox” , in Jencks. C. & Peterson, P. E. eds. *The Urban Underclass*, the Brookings Institution:3-27.
- D. K. シブラー, 04=07, 森岡孝二他訳, 『ワーキング・プア』, 岩波書店.
- Tajfel, H. & Forgas. J. P. , 81, “Social Categorization: Cognitions, Values and Groups” , in Forgas, J. P. , *Social Cognition: Perspectives on Everyday Understanding*, Academic Press :163-182.
- M. トンリー, 09, 「アメリカの刑罰政策が峻厳な理由」 , 日本犯罪社会学会編, 『グローバル化する厳罰化とポピュリズム』 , 現代人文社:16-38.
- W. J. ウィルソン, 87=99, 青木秀男監訳, 『アメリカのアンダークラス』 , 明石書店.
- J. ヤング, 99=07, 青木秀男他訳 『排除型社会』, 洛北書房.
- 湯浅誠, 08, 『反貧困』 , 岩波新書.
- Wacquant, L. , 09, *Punishing the Poor*, Duke Uni. Press.